

ダントウボウの食性に関する知見

浅井貴匡

(株)日本海洋生物研究所

ダントウボウ *Megalobrama amblycephala* は近年、霞ヶ浦周辺で急速に増加している中國原産の外来魚である。日本での実験的な導入が 1987 年にあったものの、霞ヶ浦北浦で初めて認識されたのは 2002 年とされている（野内ら, 2008）。現在、自然水域での確認から 20 年以上経過しているが、霞ヶ浦の漁師や釣り人等を除いてその知名度はまだまだ低いと考えられる。国土交通省が行っている調査で用いられる「河川水辺の国勢調査のための生物リスト」でも取り扱われておらず、付随する外来種リストにも掲載されていないため、環境調査員であっても知らない人は多いかもしれない。

ダントウボウの食性について、原産国である中国の文献、中国鯉科魚類誌上巻（伍ら, 1980）や広東淡水魚類誌（中国水産科学研究院珠江水産研究所ら, 1991）を参照すると、「幼魚の餌は枝角類、小型の甲殻類が主であり、成長するにつれて水生高等植物、特にヒラモおよびクロモ類が主である」と記載されている。

日本での食性を調査した研究例は大塙ら（2023）で、霞ヶ浦の流入河川の一つである桜川で採捕したダントウボウ（体長 21.7～43.2 cm, 34 個体）の消化管内容物調査を行い、主に陸生植物（マグワ、クズ、ヨモギなど）を摂食することが示された。原産地では主に沈水植物を摂食する一方で、霞ヶ浦では河川敷に生育する植物を摂食する理由としては、あまり沈水植物がないため、代替の餌資源として陸生植物を食べていると考え、そこに柔軟な餌利用のシフトがあるので考察されている。食性からもダントウボウの適応能力の高さがうかがえる。

今回は先行研究である成魚よりも小さい幼魚期の食性について、消化管内容物の観察結果を紹介する。観察個体はすべて霞ヶ浦西浦（土浦市）で採集した個体を用いた。既往文献に比較的近い体長 195mm の個体では、植物片や果実片のほか、コケムシ類やシマミズウドンゲ *Urnatella gracilis* のような何かの基質に固着する生物、アリ類のような陸生昆虫、ユスリカ類やカワヒバリガイ *Limnoperna fortunei* のような底泥内の生物など多様な生物が確認された。一方で体長 48mm 以下の比較的小さな個体ではいずれも植物プランクトン（藍藻：ネンジュモ類、緑藻：アオミドロ類）や動物プランクトン（ミジンコ類）が多数確認された（表）。

本種が在来種の生息環境に及ぼす影響をより理解するためには、観察する個体や時期、エリアを増やすほか、霞ヶ浦に生息する他の魚類（知見の少ないオオタナゴ、タイリクバラタナゴなどの外来魚を含む）の食性についても合わせて確認する必要があると考えられる。まずは相手を認識し、その特徴や趨向性など相手をより深く知ることが外来種問題を考える第 1 歩として大切であると私は考える。

表 ダントウボウの消化管内容物の概要

No.	全長 (mm)	体長 (mm)	湿重量 (g)	消化管長 (mm)	消化管内容物
1	250	195	177.5	500	植物片、果実片、陸上昆虫、底生動物（二枚貝類、ユスリカ類）
2	161	129	-	290	植物片
3	160	123	47.8	350	植物片
4	63	48	2.2	72	植物プランクトン（藍藻、緑藻） 動物プランクトン（ミジンコ類）
5	42	31	0.6	36	
6	41	30	0.6	30	
7	35	27	0.6	42	

引用文献

- 中国水産科学研究院珠江水産研究所・華南師範大学・暨南大学・湛江水産学院・上海水産大学. 1991. 広東淡水魚類誌. 広東科技出版社, 589pp.
- 伍 献文等著. 中島経夫・小早川みどり（訳）. 1980. 中国鯉科魚類誌上巻. たら書房, 346pp.
- 萩原富司. 2017. 霞ヶ浦で確認された外来魚ダントウボウ（コイ目コイ科）の採集記録. 伊豆沼・内沼研究報告, 11:75-81.
- 国土交通省（2025）「河川水辺の国勢調査のための生物リスト」
<https://www.nilim.go.jp/lab/fbg/ksnkankyo/mizukokuweb/system/seibutsuListfile.htm>,
2026年1月10日確認.
- 野内孝則・荒山和則・富永 敦. 2008. 霞ヶ浦北浦で確認された外来魚の導入経路. 茨城県内水面試験場研究報告
- 大塙登輝・渡辺美如々・高沢剛希・平山拓弥・加納光樹. 2023. 霞ヶ浦流入河川の桜川における外来魚ダントウボウの食性. 日本生物地理学会会報, 78:84-88.